

アクティブラーニング・スペクトラムの提案

和田 翔二郎* 飯尾 健* 溝口 侑* 小山 理子* 松下 佳代**

*京都大学大学院教育学研究科

**京都大学高等教育研究開発推進センター

1. 本研究の目的

高等教育において、アクティブラーニング（以下、AL とする）の教育的効果の研究や実践的報告は数多くなされつつある。一方で、AL の多様な方法について、どのような目的・領域・対象に適しているかという視座からの整理は不十分である。例えば Bonwell & Sutherland (1996) や O'Neal & Pinder-Grover (n. d.) はその整理に先鞭をつけているものの、わが国の教育現場の実情を十分に反映したものではない。本研究では、AL の方法の整理をアクティブラーニング・スペクトラム(以下、AL スペクトラムとする)という見方から新たに試みる。

2. アクティブラーニング・スペクトラムとは

AL スペクトラムとは、AL の方法を何らかの軸に沿って系列的に分類したものである。O'Neal et al. (n. d.) は、Simple—Complex という単一の軸に沿って AL の方法を整理している。しかし単一の軸で、AL の多様な方法を捉えることは難しい。そこで本研究は 3 つの軸を用いる。「課題の性質」、「グループサイズ」、「活動を行う期間」である（図 1）。これらの軸は、ここ数年の事例報告および実践研究から導出したものである。

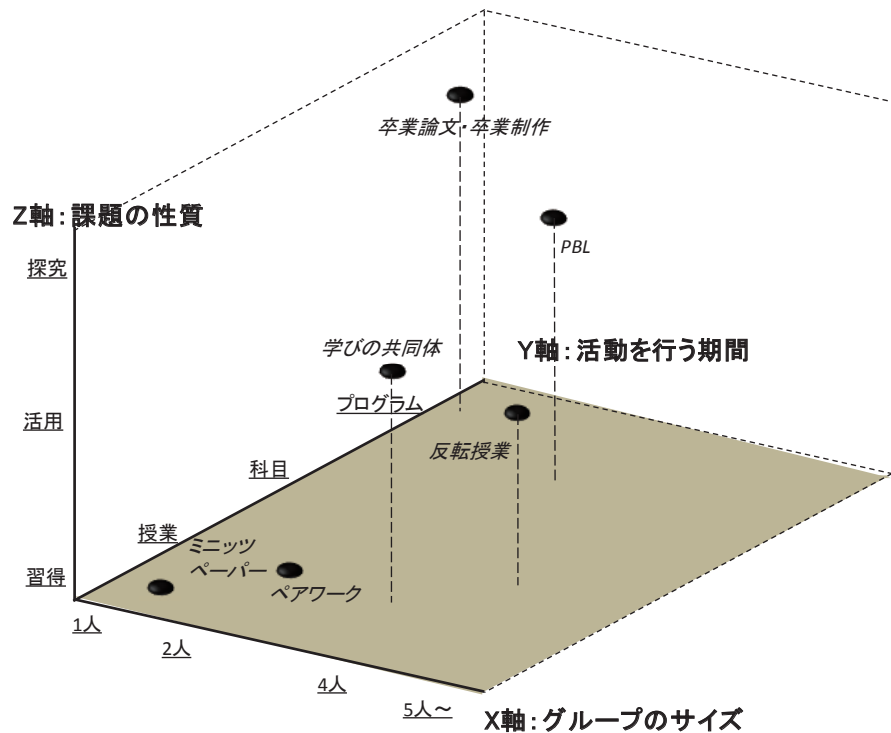


図 1 AL スペクトラム

また、これらの軸がそれぞれ意味するものを表 1 に示す。

表 1 AL スペクトラムにおける各軸について

軸の名称	水準	水準の定義
X 軸(グループのサイズ)	活動における集団のサイズ	
	授業	1 回の授業内で完結
Y 軸(活動を行う期間)	科目	授業期間の一部あるいは全体で実施
	プログラム	複数年にまたがるもの
Z 軸(課題の性質)	習得	知識・スキルの習得を目指す活動
	活用	既有知識・スキルの活用を目指す活動
	探究	新しい知識・スキルの探究を目指す活動

3. 実践への示唆

本研究で示した AL スペクトラムのような図を活用することで、授業を構造化する手がかりや、授業目的に応じた適切な方法を選択する手がかりが得られる。例えば、各軸は、それぞれ次のような観点を示すことができる。X 軸は、学習目標を達成するためには何人で行う活動が適切であるかを考える視点を与えうる。また Y 軸は、どんなタイムスパンで学習活動のプロセスを考えるかについての示唆をもたらす。さらに Z 軸は、授業目標や目的に応じた活動を選択するための視点を与えうる。

4. 今後の課題

本研究では、3 つの軸から AL の方法を整理した。今後、実践へのさらなる示唆を与えるためには、AL の方法とそれによって育成される学習者の能力との関連を示す必要がある。また、各方法間の効果的な組み合わせを検討することも求められる。

5. 参考文献

Bonwell, C. C., & Sutherland, T. E. (1996). The active learning continuum:

Choosing activities to engage students in the classroom. *New directions for teaching and learning*, 67, 3-16.

Nilson, L. B. (2010). *Teaching at its best: A research-based resource for college instructors*. San Francisco, CA: John Wiley & Sons.

O'Neal, C. & Pinder-Grover, T. (n. d.). *How can you incorporate active learning into your classroom?* Retrieved from

http://www.crlt.umich.edu/sites/default/files/resource_files/02_Active%20Learning%20Continuum.pdf